慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	否定という主張 : W.H. オーデンの『ソネット集』解釈を中心に
Sub Title	Denial and assertion : W.H. Auden's reading of Shakespeare's Sonnets
Author	大矢, 玲子(Ōya, Reiko)
Publisher	慶應義塾大学アート・センター
Publication year	2017
Jtitle	Booklet Vol.25, (2017.) ,p.20- 34
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	The expanding Shakespearean universe 2 恋愛詩 Love 図版削除
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000025-0020

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

否定という主張
—— W.H.オーデンの『ソネット集』解釈を中心に

大矢　玲子

「シェイクスピアの『ソネット集』ほど、人々がナンセンスなことを語り、また書き、知性と感情のエネルギーを浪費してきた作品は、世界文学にまたとなかろう。」20 世紀を代表する詩人 W. H. オーデン（Wystan Hugh Auden、1907–73 年）がシグネット版『ソネット集』（1964 年）に寄せた序文は、過去の批評家たちへの辛辣な言葉で始まる。『ソネット集』は「ヒツジとヤギ」を見分ける格好の試金石だとオーデンは言葉を継ぐが、その場合の「ヒツジ」とは、「詩を詩として愛し、その本質を理解する」良き批評家、「ヤギ」は「詩を歴史の記録として、または自分と思想信条が同じだという理由で」評価する悪しき批評家である（5：92 頁）。ここでオーデンが批判するのは、『ソネット集』に「私」として現れる語り手をシェイクスピアと同一視し、詩に描かれている（ようにみえる）若き美青年や腹黒い女との恋愛模様を、劇作家の実際の体験の記述と見做す、伝記批評の伝統である。なかでも、語り手が美青年に向けた憧憬を根拠に、シェイクスピアの同性愛的傾向を取りざたするのが 18 世紀以降の『ソネット集』批評の大きな流れを作ってきた。ただこのシェイクスピアの同性愛問題なるものが、オーデンのいうような低俗な「ヤギ」ではなく、むしろシェイクスピアを敬愛し、擁護しようとする真摯な学者、文学者によってそもそも提起されたことは注目に値する。そして伝記的な詮索を否定しているはずのオーデン自身もまた、『ソネット集』に同性愛者としての自分の人生を重ね合わせながら、独自の伝記的解釈に至っているのである。

以下の論考では、『ソネット集』出版当時の受容の状況をジョン・ベンソン（John Benson）が 1640 年に出版した『シェイクスピア詩集』（*Poems: Written by Wil. Shakespeare*）を主な手掛かりとして探った後に、シェイクスピアの同性愛をめぐる新しい批評言語の出現を、シェイクスピア編纂者エドモンド・マロウン（Edmond Malone、1741–1812 年）とロマン派詩人 S. T. コールリッジ（S. T. Coleridge、1772–1834 年）の美青年ソネット解釈のなかに確認する。そうした批評の伝統をふまえて、オーデンが、シェイクスピアの、また自分自身の、詩、人生、そして同性愛を語った言葉を分析するのが、以下の小論の目的である。

ベンソン版『詩集』と一般化された欲望

『シェイクスピアのソネット集』（*Shakespeare's Sonnets*、初版 1609 年）に収録された 154 編の 14 行詩について確かといえる事実は少ない。フランシス・ミアズの文芸雑録『パラスの宝』（*Palladis Tamia*、1598 年）に「親しい友人に回覧されているシェイクスピアの甘美なソネット」という言及があるので 16 世紀末にはすでにシェイクスピア作の恋愛ソネット手稿が存在していたことは間違いないが、それが 1609 年に出版されたものと同一の作品だったかは不明である。また翌 1599 年に「シェイクスピア作」として出版された詩集『情熱の巡礼』（*The Passionate Pilgrim*）には、多少の語句の異同があるものの、1609 年版『ソネット集』では 133 番と 141 番にあたる詩が収められている。1609 年版の並び順にソネットが書かれたとすると、16 世紀末までにほとんどの作品が出来上がっていたことになるが、その確証はない。1599 年版と 1609 年版のテクスト異同が、単純な転記ミスによるのか、それともシェイクスピア自身の推敲の結果なのかについても定説はない。1609 年版『ソネット集』についても、それが作者の承認を得て出版されたのか否か、またソネットの配列順は詩人の意図を反映しているのかなど、出版当時の状況をめぐり研究者の間で熾烈な論争が続いている。

なにより分からないのは『ソネット集』に対する同時代の読者たちの反響である。1590 年代にイギリスで大流行したソネット連作が、ペトラルカ（Francesco Petrarca）の『カンツォニエーレ』（*Il Canzoniere*、1350 年）に範をとり、美しく貞潔な貴婦人への愛を歌うのを専らとしたのに対して、流行に大きく遅れて出版された『ソネット集』には、美しい男性とふしだらな女性への恋情というスキャンダラスな人間関係（と見えるもの）が描かれているのである。シェイクスピアの物語詩『ヴィーナスとアドーニス』（*Venus and Adonis*、1593 年）と『ルークリースの凌辱』（*Lucrece*、1594 年）が大評判を得て版を重ねたのとは対照的に、『ソネット集』が詩人の存命中に出版されたのは 1609 年の一度きりだが、これが読者の不評によるのか、重版を妨げる何らかの圧力が働いたのかも、今となっては知る由もない。

そうしたなか、ジョン・ベンソンが 1640 年に出版した『シェイクスピア詩集』は、ソネットが描く特異な恋愛模様に対する初期の反応の貴重な記録である。ベンソンは『詩集』の下敷きとした 1609 年版の詩の配列を勝手に変更し、時には複数のソネットをまとめて 28 行、42 行の詩のユニットを作ったうえで、格言風のタイトルを付けるなど、大幅にテクストを改変した。また何編かの美青年ソネットに関しては、恋人の人称を「彼」から「彼女」に置き換えて、男女間の恋愛詩のような体裁を与えてもいる。ブルース・スミス Bruce R. Smith は、ベンソンの人称変更の背景には同性愛をタブー視する風潮の高まりがあったとして、ここに重要な社会の変化を見て取っている（Smith、15 頁）。

だが、ベンソンが『ソネット集』の同性愛を隠蔽しようとしたという見解に与しない研究者も多い。「彼」から「彼女」への人称変更は一部のソネットに限られているのに加え、両性具有的な美青年の心身の魅力に対する明け透けな讃嘆で悪名高いソネット 20 番のテクストが、何も改変されずに堂々と収録さ

れているのである。

自然の女神が自ら描いた女の顔をもつ、
私が熱愛する男の情婦である君。
女みたいに心が優しいが、浮気女のような
心変わりとは無縁だ。
目は女たちに増して輝くが、目つきはそれほど浮気でなく、
眺める対象を金色に染める。
美しい顔の男である君は、全ての顔を支配して、
男達の目を奪い、女達の魂を驚嘆させる。
君は女になるはずだったのだが、
君を作るうちに自然の女神が恋に落ち、
あるものを付け加えて、僕から君を奪ってしまった。
私の目的には無用の長物の、一物を付け加えて。
　だが女神が君に印をつけて女の享楽に供したのだから、
　君の愛は僕のものに、君の愛の実用は女達の宝としよう。

「一物」（'one thing'）に男性性器、「無用の長物」（'nothing'）に女性性器という意味を重ねた卑猥ともいえるこの詩をそのまま『詩集』に収録したベンソンに、同性愛への禁忌の意識があったとは考えにくい。

ベンソンの『詩集』、またひいてはその読者に、何より欠如しているのは、ソネット連作を物語とみなす態度、そして詩の語り手をシェイクスピア本人と同一視する意識である。そもそも 154 編のソネットはそれぞれ独立した抒情詩であり、全体を貫く明確なストーリーはないのだが、18 世紀以降の批評では、ソネット 1–126 番のなかに語り手と高貴な「美青年」（'Fair Youth'）との 3 年以上にわたる交遊を、127–54 番には外見、内面ともに「黒い女」（'Dark Lady'）との恋愛沙汰を読み取り、それを根拠にシェイクスピアの人生を語るのが当たり前になっている。しかしソネットの並び順や詩中の人称が変更されているベンソンの『詩集』から、美青年と黒い女をめぐる物語を読み取ることはそもそも不可能である。またベンソンは、『詩集』に収録した詩にそれぞれタイトルをつけ、教訓詩のような外観を与えている。例えばソネット 20 番は「交換」（'The Exchange'）という題名を与えられて、シェイクスピアの美青年に対する生々しい欲望の表明ではなく、性の転換に関する機知に富んだ一般論のような様相を帯びている。マルグリータ・デ・グラーツィア（Margreta De Grazia）が指摘する通り、ベンソン版『詩集』において、ソネットは人間一般に当てはまる教訓詩に変貌したのだ（De Grazia、163–4 頁）。『ソネット集』に描かれる恋愛の諸相が、シェイクスピアの生々しい実体験を記録した「問題作」と見做されるのは、18 世紀以降の現象なのである。

マロウンの『ソネット集』編纂と伝記批評

シェイクスピア作品の編纂技術は 18 世紀に入って飛躍的に精度をあげ、古

版本の正確な校合にもとづくテクストと、綿密な脚注を備えた戯曲全集の出版が相次いだ。だが『ソネット集』に限っては、近代的編纂を経ないベンソン版テクストの流布が続いていた。こうした状況を変えたのがジョンソン＝スティーヴンズ版戯曲全集の『補遺』(*Supplement to the Edition of Shakspeare's Plays Published in 1778*、1780年）の編纂を任されたエドモンド・マロウンである。マロウンは1609年版『ソネット集』に基づいて厳密にテクストを編纂したうえに、初版の題扉に出版者トマス・ソープ(Thomas Thorpe)が付した献辞も再録した。

> これに続くソネット集の
> 唯一の生みの親である
> W.H. 氏に
> 全ての幸福と
> 我らが不滅の詩人が約束する
> 永遠の命とを
> この本を出版する冒険者が
> その船出にあたりお祈り申します
> T. T.　(1：579頁）（図1）

碩学マロウンのこの見事な『ソネット集』版本が、その後の様々な伝記的詮索の端緒を開くことになったのはいかにも皮肉である。マロウンは自ら復元した1609年版の配列のなかに「前半の126篇は美青年に、残る28篇はふしだらな女性にあてたソネットである」という、今日にいたるまでほとんどの学者が受

図1　『ソネット集』初版（1609年)、献辞　　© British Library Board（C.21.c.44.）

け入れている2つの詩群を見出した。この「美青年」「ふしだらな女性」という登場人物を得て、『ソネット集』は恋愛抒情詩へと読み替えられていくことになる。

さらにマロウンは、詩の語り手をシェイクスピア本人と、また詩中の美青年を献辞のW. H. 氏と同一視して、先に引用したソネット20番の「顔」('Hews')という言葉を手掛かりに、W. H. 氏が「W.　ヒューズ」('W. Hews/ Hughes')という名の男であった可能性を示唆する（Malone、1：579頁）。W. H. 氏をめぐるマロウンのこの推測が、『ソネット集』を伝記的に詮索する発端となった（De Grazia、155-7頁）と同時に、詩集の内容に対する倫理的な批判を引き起こしたことも確認しよう。ソネットが教訓詩や格言と見做されている分には、語られている内容に関して特定の個人が責任を負う必要はない。だがマロウンが詩集の語り手と美青年を、実在の人物と想定したことで、詩が語る物語に対する、詩人の倫理的な責任が発生したのである。

またこのマロウンが、シェイクスピアのいわゆる同性愛問題を提起した張本人であることもここで指摘したい。『補遺』のソネット20番の脚注に注目しよう。このソネットの語り手は、女性的な魅力をもつ美青年を「私が熱愛する男の情婦」('the master-mistress of my passion')と呼んで讃嘆するが、マロウンの協力者であったスティーヴンズはこの表現に激高した。

> 男相手のこの目に余る賛美を、私は嫌悪と憤怒なくして読めない。シェイクスピアが最高の褒め言葉として使っているのと同じ表現を、ドライデンは強い非難を込めて使っていることにも注意したい。
>
> お前の男妾は、女にしては汚れすぎ、
> 男にしては女なみに堕落している。（『ドン・セバスチャン』）
>
> だがシェイクスピアに公平を期すために、『トロイラスとクレシダ』では、「男妾」という言葉が正しい意味で使われていることも、ここに記しておこう。（1：596頁脚注）

スティーヴンズは、ソネット20番の「男の情婦」に向けられた語り手の称賛に強い嫌悪を示す一方で、同じシェイクスピアの『トロイラスとクレシダ』における「男妾」('male varlet')（5幕1場15行）という言葉の使い方は褒めている。つまりスティーヴンズが問題としているのは（少なくとも表面的には）同性愛そのものでなく、それを表す言葉が使われる文脈の適否である。マロウンは1790年に出版した『シェイクスピアの劇と詩』（*Plays and Poems of William Shakespeare*）のソネット20番脚注でスティーヴンズへの反論を試みるが、その議論はいささか見当外れである。

> 男性に対してこのような表現を使うのはシェイクスピアの時代にはよくあったことで、何ら犯罪性（criminality）を帯びてはなかったし、不適切（indecorous）とは考えられていなかったと指摘すれば、スティーヴンズ氏の怒りも幾分かはおさまるのではないか。（10：207頁脚注）

スティーヴンズが俎上に載せたのは「男の情婦」という言葉遣いの適切性（decorum）の問題だけである。それに対して、シェイクスピアの擁護を買ってでたマロウンのほうが、デコーラムの問題を超えて、美青年ソネットの「犯罪性」を示唆する結果となっているのだ。シェイクスピアの同性愛は、それを否定しようとする言葉によって初めて問題となり、『ソネット集』批評の伝統に入り込んだのである。

コールリッジの美青年ソネット解釈と「兄弟愛」

スティーヴンズとマロウンの間に見られたような議論の掛け違いは、ロマン派詩人ウィリアム・ワーズワース（William Wordsworth）とコールリッジの『ソネット集』をめぐる対話のなかにも起こっている。親友同士だったこの二人は、『ソネット集』を収録したロバート・アンダソン（Robert Anderson）編『英国詩人選』（*A Complete Edition of the Poets of Great Britain*、1792–5年）を共有し、そのテクスト欄外にさまざまなコメントを書き込んだ。美青年にあてたソネット群の最後に、まずはワーズワースが次のような感想を記す。

> 127番からの情婦にあてたソネットの値打ちはパズルの1ピースにも劣り、おぞましいほどどぎつく、意味不明で、無価値である。それ以外のソネットは大体において随分マシで、数多くの非常に美しい詩行、節がある。また強い情熱が込められている部分も多い。主な欠点は―そしてこれは重大な欠点だが―単調さ、くどさ、もってまわった表現のわかりにくさである。（Coleridge、1：41頁に引用）

「［ソネットによって］シェイクスピアは自らの心の鍵を開けた」という有名な一節を含む「ソネットを侮るなかれ」（'Scorn Not the Sonnet'、1827年出版）により、ソネット形式の人気復興に寄与したワーズワースだが、1803年の時点での『ソネット集』への評価は必ずしも高くなかったことが見て取れる。

友人ワーズワースの書き込みを読んだコールリッジは、強い異議を唱えた。

> 情婦にあてたソネットを除いて、（そしてこれらの作品に対する評価も、あまりにひどいと思うが）、私はW. ワーズワースの鉛筆書きに賛成することは決してできない。（Coleridge、1：41頁）

これは実に奇妙な反論である。黒い女のソネット群を問題視する一方で、美青年にあてたソネットを高く評価する点で、コールリッジとワーズワースの評価は基本的に一致しているのである。コールリッジは、自分の長男ハートリーを念頭に、シェイクスピアと美青年の弁護の言葉を続ける。

> これらのソネットはシェイクスピアの心を説明するのに役立つのだ。こうしたソネットを理解するには、ポッターの『古代ギリシアの習俗』の、ギリシアの恋人達に関する一章を読まなくてはならない。その中には、

> テーバイの神聖隊 ［コールリッジのテクストでは、シェイクスピアの『ヘンリー五世』にも使われる「義兄弟団」（'Band of Brothers'）という英語があてられている］の記述がある。勝者ピリッポスは涙を流して立ち尽くし、戦いの場で友の身体をかばうように盾を差し出し合って絶命した義兄弟たちの死体を検分し、卑劣で、卑猥な、悪意に満ちた勘ぐりで、兄弟たちの愛が自然に悖ると疑った者たちを呪ったのだった。シェイクスピアが感じていたのもこうした純粋な愛であり、それを恥じることなどなかったし、他人がそれを疑うという可能性さえ考えていなかった・・・（Coleridge、1：42 頁）

神聖隊は、古代ギリシアで最強と謳われた精鋭歩兵部隊であり、150 組 300 名の男性の恋人同士によって編成されていたという。ここでコールリッジが言及しているのは、ジョン・ポッター（John Potter）の『古代ギリシアの習俗』（*Archæologia Græca*、1673/4 年）に収録された、紀元前 338 年のカイロネイアの戦いのエピソードである。コールリッジは、シェイクスピアと美青年を、テーバイの神聖隊の戦士たちと重ね合わせることで、その純潔を主張しているわけだが、これも的を外した弁護といわざるを得ない。ワーズワースが美青年ソネットの欠点としてあげていたのは「単調さ、くどさ、もってまわった表現のわかりにくさ」であって、同性愛には一切触れていないのである。スティーヴンズとマロウンの間の論争がそうであったように、シェイクスピアの同性愛問題は、コールリッジの弁護の言葉によって浮上するのである。

またコールリッジが、シェイクスピアと美青年との関係を「兄弟」の比喩をもって説明していることにも注意したい。『ソネット集』のなかで、美青年と語り手の間柄は、画題とそれを描く画家（ソネット 24 番）、主人と下僕・奴隷（ソネット 26 番、57 番など）、泥棒とその被害者（ソネット 35 番、92 番など）、息子と父親（ソネット 37 番）など、さまざまな喩えをもって表現されるが、兄弟の比喩が使われることは一度もない。そもそも『ソネット集』が描くのは、「盾を差し出し合う」ような対等な兄弟愛ではなく、高貴な美青年に向けたしがない役者の憧憬である。コールリッジが語る「兄弟」は、「自由、平等、兄弟愛」を掲げたフランス革命時に青春時代を送り、ワーズワースを自分の兄弟と呼んだ、コールリッジ自身の理想の投影に他ならない。コールリッジが『ソネット集』に読み取るシェイクスピア像は、読み手自身の人生を色濃く反映しているのである。

以下の議論で注目するオーデンもまた、マロウン、そしてコールリッジと同じように、強い否定の身振りによってシェイクスピアの同性愛を語ることとなる。それに加えて、同性愛者であったオーデンの場合、『ソネット集』を読み解くことは、自分自身の詩と人生との直接的な対峙を意味したのである。

オーデンの美青年たちと『ソネット集』

アーデン版『ソネット集』の編者キャサリン・ダンカン＝ジョーンズ Katherine Duncan-Jones は、シェイクスピアを同性愛という「犯罪的な行為」

と結びつけることを恐れるあまり、20 世紀の批評家は美青年に宛てたソネット群を伝記的に解釈することを忌避してきたと指摘する（Shakespeare、82 頁）。1963 年のシグネット版「序文」でオーデンが『ソネット集』をシェイクスピアの人生に即して理解することを拒絶するのも、そうした時代の趨勢に従ったかに見えるかもしれない。だが同性愛者であったオーデンにとって、『ソネット集』の伝記的解釈を否定すること、そしてシェイクスピアは同性愛者ではないと主張することは、自分自身の人生と詩に関する深い不安の表明でもあった。

シェイクスピアの『ソネット集』は、同性愛者としてのオーデンの自己形成に深く関わっている。オックスフォード大学時代、学友ビル・マッケルウィー William L. McElwee への報われることのない恋情に苦しんだオーデンは、『ソネット集』を繰り返し読んで自分の気持ちを整理したといわれる。短詩「愛したことのある者」（*'Quique Amavit'*、1927 年）に添えられたマッケルウィーへの献辞「唯一の生みの親である W. L. 氏に」（'To the onlie begetter Mr. W. L.'）はもちろん、1609 年版『ソネット集』題扉をまねたものだろう★1。

1929 年、ベルリンに滞在したオーデンは、ゲルハルト・マイヤー（Gerhart Meyer）という船員と行きずりの恋をする。マイヤーとハンブルクに旅した時にも、オーデンは『ソネット集』を旅行鞄に忍ばせていた。夜になると、美男子の船員マイヤーは、オーデンをホテルに置き去りにして、娼婦との密会に出かける。マイヤーの帰りを待ちわび、眠られぬ夜を過ごすオーデンは『ソネット集』を手に取る。

> まず僕は鏡の前に立ち、自分が肉体美においてマイヤーと対等だと思いこもうとしたが無理だった。次に僕は『ソネット集』を読み、自分の優越性、感受性を実証しようとした。タクシーの音がするたびに窓辺に駆け寄ったが、どこかのあばずれが帰ってきただけだった・・（Page、25 頁に引用）

オーデンが後のエッセイや講演で繰り返し言及することになるソネット 57 番には、このベルリンの夜の記憶が刻印されていたのだろう。

> 僕は君の奴隷だから、あなたの欲望の
> 時間と、場合に、従うしかない。
> 僕には、費やす時間も、果たす役割も
> ありはしないのだ、あなたが求めるまでは。
> 果てしなく続く時間を僕には責められない、
> 我が君主よ、あなたを待ち時計を見つめる間も。
> 不在の苦しみを咎めることもできない、
> あなたが、下僕である私に暇を告げても、
> 嫉妬心に駆られて、あなたの居場所を尋ね、
> 何をしているのかと推測さえもできない。

哀れな奴隷はここに留まり、あなたが居るところでは、
どれほど皆が幸せだろうと思うばかり。
　愛とはそれほどの愚か者なので、あなたが何をしても、
　あなたの望みを決して悪くはとらないのだ。

1939年にアメリカに移住したオーデンは、当時18歳の美青年チェスター・コールマン Chester Simon Kallman と出会い、自ら「結婚」と名付けた恋愛関係に入った。多情なコールマンが浮気をした挙句、オーデンとの性的関係を一切拒否したことで、この「結婚」は 1941 年には破局を迎えたが、その後も二人は同居を続け、イーゴリ・ストラヴィンスキー（Igor Stravinsky）作曲『放蕩児の遍歴』（*The Rake's Progress* 、1951 年）、ハンス・ヴェルナー・ヘンツェ（Hans Werner Henze）作曲『若い恋人達へのエレジー』（*Elegy for Young Lovers*、1961 年）、ニコラス・ナボコフ（Nicolas Nabokov）作曲『恋のから騒ぎ』（*Love's Labour's Lost*、1973 年）などのオペラ台本を合作した。

『ソネット集』「序文」の執筆の年、コールマンがオーデンと冬を過ごすことを断り、ギリシアのボーイフレンドの元に走ったことで、二人の関係は大きな転機を迎えていた。「序文」のなかでオーデンはシェイクスピアの美青年を「あまり感じが良くない若者で、自分の美貌を鼻にかけ、魅力を振り撒くこともあるが、基本的には浮気で冷淡、シェイクスピアを言いなりにする力をもっていることを意識し、それを利用する一方で、自分が知らずにどれほど深い愛情を相手に抱かせたのか気づこうともしない」と評しているが、この描写にコールマンの肖像を見て取る研究者は数多い。オーデンが『ソネット集』に読み取るのは、美青年の裏切りにあいながらも、「無限の神聖さをまとった一個の人間の顕現」である「エロスのヴィジョン」（5：102 頁）を信じようとする、シェイクスピアの苦闘の物語である。

私が思うに、ソネットが語るのは、少なくとも 3 年間続いた関係のなかで垣間見たヴィジョンの栄光を、相手の方がそのヴィジョンにわざと泥を塗るような行動をとるにも関わらず、何とか守り抜こうとする、シェイクスピアの苦しみに満ちた物語ではないだろうか。（5：103 頁）

この苦渋に満ちたシェイクスピア像が、コールマンの浮気に耐えるオーデン自身と二重写しとなるのは、エドワード・メンデルソン Edward Mendelson の指摘する通りだろう（Mendelson、467 頁）。

『ソネット集』に同性愛者としての自分の人生を重ね続けたオーデンが、この詩集の伝記批評、そしてシェイクスピアの同性愛を否定する言葉は、矛盾と韜晦に満ちたものである。オーデンは『ソネット集』伝記批評を否定する理由として、作家の人生は「作家本人、また彼の親しい友人にとっては恐らく重要だが、一般の人々には関係ないし、関係を持つべきでものでもない」ということを挙げている（「序文」、5：94 頁）。実はこれは、あるインタビューで「あなたが自伝を書かない理由はなにか」と質問されたオーデンが与えた返答と、ほ

ぼ一言一句、同じである[★2]。またオーデンは『ソネット集』は個人的な手紙や日記と見做すべき作品で、その詮索は倫理的に許されないとも主張するが（「序文」、5：93, 106頁）、ここにも、遺言で自分の手紙の処分を依頼するほどの秘密主義者だったオーデン自身の生き方の反映を見ることができる。つまり『ソネット集』伝記批評を否定すること自体が、オーデンにとって高度に自伝的なのである。

これほど伝記批評を否定する一方で、『ソネット集』にはシェイクスピアの「赤裸々な自伝的告白」が読み取れるともオーデンはいう。

> 『ソネット集』について、特にそれが書かれた時代を考えると、これらの詩が赤裸々な自伝的告白という印象を与えるのは、誠に驚くべきことである。エリザベス朝の人々は、自伝を書いて「心の鍵を開ける」ような習慣はもたなかった・・・ソネット以降、英語の詩でこれほど自伝的な様相を示す作品は、メレディスの『近代の恋』まで見当たらないのみならず、メレディスに至っても、個人的な出来事は、念入りな「恰好」をつけている印象だ。（5：105頁）

『ソネット集』に詩人の人生の反映を見ることを戒める一方で、詩人の内面の告白こそがこの詩集の文学史上の達成であるとオーデンは論じているのである。この矛盾した主張の背後には、『ソネット集』に自分自身の内面の生々しい表現を見出したオーデンの、畏怖と感歎が隠れているのかもしれない。

オーデンはまた、詩人と美青年の関係に同性愛というレッテルを貼ることを拒絶し、美青年ソネットにかこつけてシェイクスピアを仲間扱いしようとする同性愛者に対して鋭い批判を浴びせかける。

> 同性愛者の読者は、我らが至高の詩人をホミンテルンの守護聖人にしようと躍起になり、最初の126篇のソネットにやたらと注目して、明らかに性的な関係を歌っている黒い女にあてたソネットや、シェイクスピアは結婚して子供もいたという事実を、無視しようとする。（5：101頁）

「ホミンテルン」（‘Homintern’）は、ホモセクシュアルとコミンテルンを掛け合わせて、芸術の世界を牛耳ろうと企む同性愛者のネットワークといった意味をもたせた造語で、オーデンをとりまくゲイの芸術家たちの間で流行していた。オーデンは、『ソネット集』解釈に関しては、ホミンテルンの仲間たちと一線を画そうとしたかに見える。

だがオーデンは、自らのホミンテルン批判を覆すような発言もしている。「序文」執筆と同時期（1964年1月21日）にストラヴィンスキー宅を訪れたオーデンは、「至高の詩人［つまりシェイクスピア］がホミンテルンに属していたと認めるのは時期尚早だ」と漏らしたのである（Craft、390頁）。「時期尚早」というのは、イングランドとウェールズにおける同性愛行為の合法化は1967年まで実現しなかったという事情を指しているのだろう。ダンカン＝ジョーンズ

は、「序文」におけるホミンテルン批判は保身のためのオーデンの方便であり、同性愛者であることの露見を恐れる彼の「臆病さ」の証拠と考える（Shakespeare、80–1頁）。確かに、死後出版とはいえ、同性愛者としての自らのアイデンティティに深く関わる『モーリス』（*Maurice*、1913年）を執筆したフォースター（E. M. Forster）とは違い、オーデンは自分の性的志向を直接的に明かすような作品をついに書かなかったし、数多い恋愛詩においても、恋の相手を女性に置き換えたり、男性にあてた恋歌を女性歌手ヘドリ・アンダソン（Hedli Anderson）に歌わせることで、異性愛のような見かけを与えることも多かった[★3]。だが伝記批評にせよ、ホミンテルン問題にせよ、この「否定する」という身振り自体が、同性愛者としてのオーデンの重要な自己表現なのである。

『ドリアン・グレイの肖像』（*The Picture of Dorian Gray*、1890年）の序文で、オスカー・ワイルド（Oscar Wilde）は「批評の最高の、また最低の形は、一種の自伝である」と洞察する（Wilde、17頁）。オーデンが自己投影的な『ソネット集』論を展開したこと自体は、批評というものの当然の性質といえるのかもしれない。ただここで、否定することによってはじめてオーデンが同性愛を語り得たことは注目に値する。イヴ・コゾフスキー・セジウィック（Eve Kosofsky Sedgwic）が指摘するとおり、同性愛は言語化を拒むセクシュアリティである。それは「口にすることさえしてはならない」（『エペソ人への手紙』、5章3節）罪であり、ワイルドの恋人だったアルフレッド・ダグラス（Alfred Douglas）の有名な言葉によれば「自らの名を語ることのできない愛」（'The love that dare not speak its name'）である（セジウィック、105頁）。マロウン、コールリッジ、そしてオーデンが、美青年ソネットにおける愛を語る言葉も、否定することで言語化をする、否定神学のような様相を帯びざるを得ないのかもしれない。だが本来の否定神学が全ての述語を超える神との合一をめざすのに対して、『ソネット集』批評における否定の言葉は、無数の矛盾や誤謬に引き裂かれているのである。

ここで、オーデンが自分のセクシュアリティについて言及した初期の長編詩『バイロン卿への手紙』（*Letter to Lord Byron*、1937年）に注目しよう。ルイ・マクニース Louis MacNeice とのアイスランド旅行記（『アイスランドからの手紙』*Letters from Iceland*）の一部として書かれたこの詩のなかで、オーデンはシェイクスピアのソネット121番の9 − 11行目を引用しつつ、自分の同性愛的傾向について内省する。

「いや、私は私だ。私の悪行を咎める人間は、
自分の悪を数え上げているに過ぎない。
私が正しく、彼ら自身が間違っているかもしれないのだ。」
シェイクスピアはそう語った。でもシェイクスピアは分かっていただろう。
私は、自分一人の時以外、そんなふうには言えないし、
死ぬまで、静寂の中に、「ウィスタンが大人に
なれなかったのは残念だ」という声を聴くしかない。（911–17行）

ウィスタン、つまりオーデンが「大人になれない」というのは、同性愛者は未熟な幼児性からぬけだせない人間だという、フロイトに由来する俗説への言及である。ソネット121番のコンテクストのなかで「悪行」が何を指すのかははっきりしないが、オーデンがそれを同性愛と関連付けているのは確かである。そしてオーデンが自らのセクシュアリティを語る言葉がこれほどの否定性に満ちていることに改めて驚かざるを得ない。「いや」（'No'）という言葉で始まるソネット121番の語り手の言葉に対して、更なる否定形（「そんなふうには言えない」）で答えるのみならず、この詩が再版された折に、オーデンはこの重要なパッセージ全体を削除してしまったのである。オーデンは人生の様々な局面で『ソネット集』に自分の分身を見出し、強く共感していたにも関わらず、この詩集を語る彼の言葉は徹底した否定、そして自己否定に貫かれているのである。

「真実の心の結婚」とシェイクスピアの否定

リヒャルト・シュトラウス Richard Georg Strauss とフーゴ・フォン・ホフマンスタール Hugo Laurenz August Hofmann von Hofmannsthal の往復書簡集の英訳本出版に際して、オーデンは「真実の心の結婚」'The Marriage of True Minds' と題する書評を『タイムズ文芸付録』（*Times Literary Supplement*）に寄稿した（1961年11月10日付）。作曲家とその台本作者としてのシュトラウスとホフマンスタールの関係は決して円満ではなかったが、二人の共同作業は『薔薇の騎士』（*Der Rosenkavalier*）、『ナクソス島のアリアドネ』（*Ariadne auf Naxos*）など一連の傑作オペラに結実した。オーデンはこの二人の芸術家の結びつきを、シェイクスピアのソネット116番の有名な冒頭の一節（「私に真実の心と心の結婚への / 異議を唱えさせないでくれ」）を借りて表現したのである。

オーデンはこの書簡集のアメリカでの出版にも力を尽くし、ランダムハウス社からの出版が決まった際には『ワーキング・フレンドシップ』（*A Working Friendship*）という新しい書名を提案した。「実りある友情」もしくは「仕事上の友情」とでも訳すべきこの題名が、書評の「真実の心の結婚」を踏まえているのは明らかだが、オーデンは命名の理由を「誤解の余地が一番少ないから」と説明している（5 : 927頁）。シュトラウスとホフマンスタールは、同性愛はおろか、普通の意味での友人とさえいえないほど不仲だったので、結婚の比喩は相応しくないと考えたのであろうか。

1966年、男性アーティストの共作の比喩としての「真実の心の結婚」という言葉を、オーデンは自分の手帳に再び書き付けている。このメモ書きでオーデンが想定する合作者は、同性愛の恋人同士である。

> 真実の心の結婚。二人の合作者の間には、性別、年齢、容姿とは関係なく、ある種のエロス的な絆が存在する。同性愛者（queers）は、普通の結婚をして親になることが許されないのだから、二人の協力を必要とするタスクと、協力に適した相手を、意識して探さないようでは馬鹿である。私の場合、合作はほかのどんな性的な関係よりも（性的な快楽とは別物の）エロス的な喜びを与えてきてくれた（Mendelson、470–1頁に引用）。

この記述に、オーデンとの恋愛関係は短期間で終わったものの、共作を通しての協力関係を続けたクリストファー・イシャウッド Christopher Isherwood、ベンジャミン・ブリテン Edward Britten、そしてもちろんコールマンといった、同性愛的指向をもつアーティストたちとの「心の結婚」が含意されているのは間違いない。（図 2）オーデン研究の泰斗エドワード・メンデルソンは、この一節をもって、オーデンの「エロスのヴィジョンが、さまざまな困難を乗り越え、ヴィジョンの消滅後にも永らえる結婚へと変容を遂げた」ことの証しだと考えている（Mendelson、471 頁）。だがこれは楽観的、そして「肯定的」に過ぎる見方ではないだろうか。そもそも永遠の愛の理想を歌ったとされるこのシェイクスピアのソネット 116 番自体が、驚くほどの否定語、また否定的なニュアンスの言葉で成り立っているのである。最初の 12 行を原文と日本語訳で引用してみよう。（イタリック体による強調は筆者による。）

Let me *not* to the marriage of true minds
Admit *impediments*; love is *not* love
Which *alters* when it *alteration* finds,
Or *bends* with the *remover* to *remove*.
O *no*, it is an ever-fixed mark,
That looks on *tempests* and is *never shaken*;
It is the star to every *wand'ring* bark,

図 2　BBC ラジオで作曲家ヘンツェと『若き恋人達へのエレジー』を語るオーデン（中央）とコールマン（左）（1961 年）　© BBC

Whose worth's *unknown*, although his height be taken.
Love's *not* Time's *fool*, though rosy lips and cheeks
Within his *bending* sickle's compass come;
Love *alters not* with his brief hours and weeks,
But bears it out even to the edge of *doom*.

私に真実の心と心の結婚への
異議を唱えさせないでくれ。
相手の心変わりで変わるような、
邪魔されて変節するような、愛は、愛ではない。
いや違う。愛は嵐を遥かに見下ろし、
揺るぐことのない北極星だ。
愛は彷徨う船の導きの星であり、
その高さは測れても、価値は計り知れない。
愛は時の道化ではない。薔薇色の唇や頬が
時の鎌に刈られることがあっても、
愛は寸刻の時や週で変わることなく、
最後の審判の間際まで続くものだ。

オーデンが『ソネット集』を否定形で語っただけではない。シェイクスピアが愛を語る言葉自体が、否定神学的なのである。またこのソネットを締めくくる二行連句（「もしこれが誤りで、私がその誤りの実例となるなら / 私は何も書かなかったことに、また愛した人間などいなかったことになる」）が示唆する愛の不可能性への怖れは、そのまま、オーデンの不安と強く共鳴しているのである。

註

シェイクスピアの『ソネット集』からの引用はアーデン版に、オーデンの散文作品からの引用はメンデルソン編 *The Complete Works: Prose* に、それぞれ基づく。また論文中の日本語訳は、全て著者による試訳である。

☆1――オーデンがマッケルウィーに宛てた手紙は、大英図書館ホームページにて閲覧することができる（https://www.bl.uk/collection-items/letters-from-w-h-auden-to-william-l-mcelwee-and-patience-mcelwee-1927-29#sthash.AEGKYPor.dpuf）。

☆2――BBC1 の 'Parkinson'（1972 年）。このインタビューは 2009 年 5 月 17 日に BBC4 で放映されたドキュメンタリー番組 'Tell Me the Truth about Love' にも引用されており、現在は YouTube で閲覧可能である（https://www.youtube.com/watch?v=gvezOvM_VgQ）。

☆3――「愛の真実を教えて」（'Tell me the Truth about Love'）、「葬式のブルース」（'Funeral Blues'）、「ジョニー」（'Johnny'）、「カリプソ―」（'Calypso'）を収録した、ベンジャミン・ブリテン作曲『ヘドリ・アンダソンのためのキャバレー・ソング』*Cabaret Songs for Hedli Anderson* を参照のこと。

参考文献

Auden, W.H. *The Complete Works: Prose*. Edited by Edward Mendelson. 6 vols. Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1997–2015.

-----. *The English Auden: Poems, Essays and Dramatic Writings, 1927-1939*. Edited by Edward Mendelson. London: Faber and Faber, 1977.

-----. *Juvenilia: Poems, 1922–1928*. Edited by Katherine Bucknell. Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1994.

-----. *Letters from W. H. Auden to William L. McElwee and Patience McElwee, 1927–29* (https://www.bl.uk/collection-items/letters-from-w-h-auden-to-william-l-mcelwee-and-patience-mcelwee-1927-29#sthash.AEGKYPor.dpuf, last accessed 18 November 2016).

-----, and Louis MacNeice. *Letters from Iceland*. London: Faber and Faber, 1937.

Benson, John. ed. *Poems: Written by Wil. Shakespeare*. London, 1640.

Bozorth, Richard R. *Auden's Game of Knowledge: Poetry and the Meanings of Homosexuality*. New York: Columbia University Press, 2001.

Coleridge, Samuel Taylor. *Marginalia*. Edited by H.J. Jackson and George Whalley. 6 vols. *The Collected Works*. Bollingen Series. Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1980–2001.

Craft, Robert. *Stravinsky: Chronicle of a Friendship*. Rev. and expanded edn. Nashville: Vanderbilt University Press, 1994.

De Grazia, Margreta. *Shakespeare Verbatim: The Reproduction of Authenticity and the 1790 Apparatus*. Oxford: Clarendon Press, 1991.

Farnan, Dorothy J. *Auden in Love*. London: Faber and Faber, 1984.

Mendelson, Edward. *Later Auden*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1999.

Malone, Edmond. *Supplement to the Edition of Shakspeare's Plays Published in 1778*. 2 vols. London, 1780.

-----. *Plays and Poems of William Shakspeare*. 10 vols. London, 1790.

Page, Norman. *Auden and Isherwood: The Berlin Years*. Basingstoke: MacMillan Press, 1998.

セジウィック、イヴ・コゾフスキー.『クローゼットの認識論：セクシュアリティの20世紀』. 東京：青土社, 1999.（Eve Kosofsky Sedgwick, *Epistemology of the Closet*, 1990）

Shakespeare, William. *The Sonnets*. The Arden Shakespeare. Edited by Katherine Duncan-Jones. London: Bloomsbury Publishing, 1997.

Smith, Bruce R. 'Shakespeare's Sonnets and the History of Sexuality: A Reception History'. In *The Poems, Problem Comedies, Late Plays*. Volume 4. *A Companion to Shakespeare's Works*. Edited by Richard Dutton and Jean E. Howard. Malden, MA: Blackwell Publishing Ltd, 2003. Pp. 1–26.

Wilde, Oscar. *Complete Works*. Edited by Vyvyan Holland. New York: Harper Collins, 1989.